

.....
 書 評

船曳建夫 他編

『新たな人間の発見』

岩波講座 文化人類学 第1巻

東京, 岩波書店 1997年

296頁 3200円

稲賀 繁美*

二十世紀の世紀末に臨んで、既存の多くの学問領域が危機にある。あるいはそう自己診断している。文化人類学もまた例外ではない。書評を依頼された門外漢は、たまたまここ数年、国立民族学博物館でのいくつかの共同研究の末席を汚している。そこでも、日常的な研究そのものの意義、学問の社会における位置付け、大学や社会への知の還元のあるかたなどが反省の材料となる機会が多い。学問のなりたちを抜本的に問い直すために、いま何が問われなければならないのか。あるいはそんな問いは学問の営みには無用なのか。

書評者は、目下日本を留守にしている関係もあり、本講座の狙い、といった文書には執筆時点で接する機会を得なかった。従って、今回の企画の意図については、巻末にある13巻の題名から推測するしか手掛かりがない。ひとつ明らかなのは、自分の属する文化を離れた土地／文化圏でフィールド・ワークをして、その土地から情報を持ち帰り、それを学問の掟にしたがって加工＝彫琢すれば、それで学問的業績として認知される、という図式が、少なくとも各巻の表題からは消滅していることだろう。もはや古典的な意味でのフィールド・ワークが成立しえない地球的な状況。今や文化人類学は、自らの使命を再設定しないことには、制度的な生き残りさえ危ぶまれかねない。背後では、これまで狭い意味での国民文学研究や一

国史に自己限定してきた人文諸分野が、ポスト・コロニアル状況、ジェンダー研究などの展開とともに、これまでで文化人類学固有の領域だったはずの文化現象に参入を始めている。

また冷戦構造の崩壊や世界諸地域での、もはや超大国の利害の単純な代理戦争とはいえない地域紛争の多発が、国際政治学の枠組みの再設定、開発援助の政治・経済学、環境学、宗教紛争との取り組み、異文化共存、移民にたいする国際的規定の再検討といった学問的関心を浮上させる。文化人類学は、これら現在の人類が抱える文化的問題それぞれとの取り組みをも要求されるに至っている。このなかで第1巻を占める『新たな人間の発見』は、一方では自然人類学の最近の成果、進化心理学、比較行動学といった、出自としては元来自然科学系の隣接領域からの発言を求め、また他方では、情報科学、生命論など最近急速に注目を浴びるに至った領域からの知見も動員して、「人間」に焦点を当てた、文化人類学のあたらしい課題を「発見」しようとする試みらしい。だがその試みは、編著として実現されている、というよりは、むしろ読者ひとりひとりの課題として、いわば生の素材のまま投げ出されている。

船曳建夫氏の「序」が、編著に含まれた論文の要約を与え、それらを統括するために、「人間のよなもの」という、人間を定義づける曖昧な外枠のたゆたいそのものに、主題ならざる問題圏のありかを指し示している。むしろ人間は人間ならざるものとの揺らぐ境界線に対概念として浮き上がる。だがこの理論的設定の可能性にむかって、以下の各章が、固有の領域から必要な話題を過不足なく持ち寄っているかといえば、そこまでの収斂は期待できない。それぞれの分野での話題が、限られた紙面の範囲で、執筆者それぞれの学問分野の流儀に沿って提出され、編著としてはそれをなんとか寄せ集めた段階を越えていない。話題設定に関して、最初に提出された草稿を巡って、執筆者が互いに議論を戦わせ、フィードバックを試みたりえで、編著の全体に有機的な糸が緊張を伴って張り巡らされる—そうした対話意識に形を与えるだけの精神的余裕が、現在の日本の多忙な人類

* 国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学

学者とその周辺には欠けている。

その結果、この編著は、いわば、大学の一般公開講座「人間とは何か」に各学部から講師を派遣しただけ、といった趣を宿すことになる。近年の大学の授業改革や、またとかく集合住宅ならぬ集合授業と批判されるリレー式の授業がしばしば露呈する限界が、ここでも反復されている。すなわち講師がそれぞれ自分の専攻領域から知識を切り売りして持ち寄るのは、あくまで準備作業であって、本来そこから先の中心的作業であるべき討論と、その結果として、読者も含む参加者の意識を更新する、という営みが大切なはずだ。講座が社会に問うべきは、その成果ではないか。だがそれは、今回の企画を見るかぎり、講座本体ではなく、その外部へと排除されている。元来京都大学人文科学研究所を震源地として、今日では大学共同利用施設での研究の一環としてお墨付きを戴いた共同研究は、近年は形骸化してきた。もはや当初の異分野衝突の効果を上げ得ず、ひたすら業績点数稼ぎの媒体へと変質した共同研究。それを越えるパラダイムをこそ、本企画の続刊に期待したい。文化人類学ならざる分野のゲスト・スピーカーの話を持って、よい刺激になりました、で終わっては進歩はない。

これと関連するのが、この編著の読者はどのあたりに設定されているのか、という疑問である。大学の教育改革で問われたもうひとつの疑問は、学術的研究成果を大学の授業でいわば適度に希釈した研究発表として提供しても、今日のこの国の大半の、それも専攻とは無縁の教養課程一般学生たちにとっては、ほとんど無意味で、教育的効果にも乏しいとの反省であったはずだ。せつかく、狭義の文化人類学とは異なる領域からの応援を得ながら、この国の仕来り——既に常に研究者である人達に向かって、研究者共同体内部の閉じた回路で情報を流通する——に風穴を穿とうとする指向は、この編著からは見えてこない。

また、本来本書に集められた論文を出発点に議論を展開するなら、むしろ「人間」で括る発想そのものが、最終巻の『文化という課題』との対を意識したためか、合財袋に過ぎた恨みも否定でき

まい。あきらかに各章の基本的認識で対立があるのに、その矛盾を摘出し、議論する場所が設けられていない。第1章、山際寿一「ヒトはいつから人間であったのか」が提起する、食物の供給と子育てとの分担による「家族」の成立、といった仮説は、子育てをメスの仕事と規定する限りで、近年の女性論の立場からのイデオロギ的反論を呼び得る。「初期人類は、脳が類人猿の限界値を越えて成長するように、胎児の状態で赤ん坊を生むようになった」(p.55)とあるが、こうした目的合理性による因果律的な説明を、あたかも人類の意図のごとくに語る論理そのものが——たとえば第3部で繰り返し議論される遺伝子のふるまいや免疫系の自己認識などは、まったく矛盾した構造を示して——問題を提起しよう。

さらにこの山際の説明は、第2章、長谷川寿一「こころも進化する」——これは、進化心理学の総論紹介に紙面の大半が割かれた論文だが——の基本的提言たる配偶者選択、性淘汰とどうかみ合うのか、それとも矛盾するのか。これまた読者には不明なまま、両者には何らの対話や橋渡しも試みられない。さらに第2章で断定的に述べられる、文化集団ごとの性行動特性の統計学的処理は、いまや文化を扱う学問で広範に問題視される手法であろう。たがそうした手法の問題点は素通りして、統計調査の結果があたかも客観的な基礎を提供するがごとく、性的暴力の発現形態を、文化の型によって説明することに、援用される。こうした自然科学的方法と、文化人類学が忌避する本質論的文化規定とが相いれないこともまた、この論文の周辺では一切議論されることがない。女性の多産が男性の繁殖力に及ばない、といったいわば自明の事実が注で敢えて指摘されるが(p.8-4)、例えばそれを、フルベ社会では、妊娠中の妻の負担軽減のために一夫多妻の形態が取られたと想定した、嶋田義仁の——あるいは女性論者の攻撃を受けかねぬ——最近の仮説などと関連づける、横の連携も図られていない。

第3章、正高信男の「笑い人間」は、乳児が社会的認知を受ける過程で笑いの果たす役割を、人類特有の発声装置の形態変化や、柳田国男のワ

ラヒとエミとの区別を援用しながら展開した創意に溢れる論文で、編者も認めるとおり、もっともスリリングな仮説構築を果たしている。乳児の大人びた行動への大人の直観的なワラヒを、乳児が称賛として受容する段階から、次に笑われることを失敗——罪？恥？——として学習しなければならない——すなわちエミへの転換——という転倒した状況。なお仮説の段階にとどまる説明も残るが、これは乳児の社会化の過程の複雑な機構の一端を説き明かして衝撃的だ。この議論を受ければ、さらに具体的に展開を見ただろうと推測されるのが、続く第4章、福島真人「構築される身体」。大脳皮質だけの暴走を許す抽象的な社会理論操作は、問題とすべき「身体」とは無縁となる。舶来品社会理論の批判的復習に終始自己限定するようなハビトゥスがなぜ日本の社会学周辺で定着したのか、をこそ問いたい（言語習得における習得者と周囲の社会的偏差・葛藤にかんして、レイコフとブルデュー（拙訳『話すということ』）とのあいだで直接的にやりとりのあることも、ここでは触れられていない [cf.p.138]）。

第5章、落合一泰「東方の驚異」は、単独論文として力作だが、ワイルド・マンとしての異人観の博学な追跡の手法がやや単調で、編者のなかでは浮いた印象が惜しい。恐怖としての他者認識という話題で、続く第6章、田辺繁治「苦しみと人間の可能性」における、エイズ感染の恐怖という問題意識とより積極的に交錯させれば、次なるパラダイム変換へと、もう一皮剥けたはず。その田辺論文は、タイにおける霊媒カルトとHIV感染者グループとを一体に捕らえ、HIVへの感染によって「生まれ変わる」という患者の表現に、病気からの逃避ではなく「自己への配慮」を見いだす、という大切な観点に至る。だが、従来の民族誌の文体に忠実なあまり、医療の現場の詳細な観察へは進まず、その前で立ち止まってしまう。これら両論文とも、恐怖を排除するのではなく、むしろ恐怖との積極的遭遇によって自己を変革する可能性への注目において、そのまま第3部「新たな人間の目覚め」という問題意識に繋がりが得たはずだ。

その第3部は、第7章、奥野卓司「近未来のトーテミズム」、と第8章、竹村真一「拡張する人間観」とからなる。だが、せつかくここまでの議論を集約する場所がここにありながら、その役割が十分には果たされていない。また、2論文を、ただ並列するだけでなく、ふたりの論者に相互批判の場を提供すれば、議論は白熱したのではないか。奥野論文は近年の電子テクノロジーへの楽観的な魅力を語るが、例えば流行語の綴れ織程度の論文では公刊には漕ぎ着けない北米学術産業のさまざまな出版抑圧の文化的検閲が、その代償装置として電子メールの垂れ流しを招いている、といった機構にも言及すべきではないか。また『エヴァンゲリオン』の中性な子供たち——とりわけシンジ——が、なぜ悲しげなのか、といった基本的な重要事項への考察も欠落している。評者は、ブルデューのハビトゥスが意外と運動部系の「工業的身体」(p.261)の発想に近い点に、その近代主義を批判したこともあるが、そうした見解を共有する竹村論文はまた、「ハッハッハッ」という断

続的な発笑練習が、言語習得に不可欠と~~なる~~正高の知見 (p.109) を引き継ぎ、そうした発声を獲得しそこなった聴覚障害者が、音声言語獲得の困難を克服するうえで身体言語を発達させる、といった代替装置の意味へと切り込んでゆく。^{カクン}

「人類」という障害、さらに「健常者」であることの障害（社会的に認定されるような障害の欠如という障害に無自覚という二重の障害）を踏まえたうえで、文化人類学者は知的異常者＝障害者という自己認識をもってもよいだろう。「健常者」の群れから離れて、「健常者」集団の間の媒介項となり、「普通」の世界に異常と「驚異」を伝える。そうした役割は、社会人類学者が積極的に社会に果たしてゆくべき務めかもしれない。本企画全編にわたってこうしたキャッチボールの網の目を張り巡らせ、人類学者共同体の外部との回線も提供できたならば、「新たな人間の発見」のために、その使用価値も格段に広がるだろう。「補の巻」で、その「拡張」のための配線図が提供されることを期待したい。